

## 「亡命」作家レーミゾフと「記憶」

——『剪り取られた眼で』以後のレーミゾフ——

淵 上 克 司

眠<sup>ゆめ</sup>の作家 A. M. レーミゾフ (1877~1957) について、彼の日記、書簡、文学論、そして作家であると同時に画家でもあった彼の絵画等を収めた貴重な記録『アレクセイ・レーミゾフ Алексей Ремизов』(1959)を残してくれた童話作家 Н. Кодрянская が、彼のどの本の内に彼の謎を解く鍵を探ることができるべし、と云ふ。『眼を剪り取られた眼で』だと思ふ。レーミゾフは次のように答えていた。『眼を剪り取られた眼で』だと思ふ。あの本の中で私は自分をとことんまで裸にした。それから、私の『お日様を追って』だ。あれを書いた時は私は、何も考えず、何も頭の中から捻り出そうともせず、ひたすら童話を生み出し——大地に生きる喜びを歌ったのだ！<sup>(1)</sup>』

1921年8月7日、A. ブロックの死の日にロシアを永遠に去ったレーミゾフは、その後十年間、ベルリン、パリ、とその時々亡命の中心地を転々としながら、『町のざわめき (Шумы города)』(1921)、『ロシア民衆の童話集 (Сказки русского народа)』(1923)、『渦巻くルーシ (Взвихренная Русь)』(1926)等を発表、亡命の「古き世代」の作家として旺盛な創作活動を続ける。

しかし、1933年、レーミゾフとは対照的な文学的伝統を持ち、レーミゾフとは犬猿の仲であった<sup>(2)</sup> И. ブーニンのノーヴェル賞受賞と相前後してレーミゾフは完全な沈黙に陥る。この沈黙は1946年まで続く。十年余りに亘るこの沈黙期のレーミゾフについては外面的な生についても内面的な生についても資料は極度に乏しい。彼の沈黙の外面的理由は二つ挙げられる。一つは1932~33年を境にそれだけでなく「私達は貧困に富んでいた<sup>(3)</sup>」という彼の窮乏生活が極度に悪化したこと、もう一つはそれに伴う妻セラフィーマの病状の悪化である。事実、1940年6月のドイツ軍のパリ爆撃から、1943年5月の妻の死に到るまでの3年間、レーミゾフは一度も筆を握ることさえできなかった<sup>(4)</sup>。

『剪り取られた眼で (Подстриженными глазами)』(1946了、1951発表)はこの亡命地での長い沈黙を突き破った自伝的長編である。この作品によって彼

は自らの文学的危機を克服すると同時に、亡命の「古き世代」の作家としての名を取り戻し、以後七十歳を超えながらもなお堰を切ったように、妻セラフィーマの生涯を描いた長編『薔薇色の閃きの中で (В розовом блеске)』(1952)、独特のゴーゴリ論『事物の火 (Огонь вещей)』(1954) 等々を發表して行く。上述の Н. Кодрянская の記録もその刊行の発意はレーミゾフによるものであり<sup>(5)</sup>、半ばレーミゾフ自身の著作である。レーミゾフが「私をとことんまで裸にした」記憶の書『剪り取られた眼で』は、これら晩年のレーミゾフの諸作の創造の源である。

一方レーミゾフがその創作の無意識性と大地との繋りを強調する『お日様を追って (Посолонь)』は、1907～12年に發表された彼の処女童話集。そこで彼は彼の民衆文学探求の軌跡と彼自身の原基探求の軌跡とを融合した童話世界を創造、事実上彼はこの作品によって作家として出発することとなった<sup>(6)</sup>。

本稿の課題は、『剪り取られた眼で』を中心とする 1950年代のレーミゾフの諸作と処女童話集『ポーソロニ』を繋ぐ記憶の核を見つめ、かつ、亡命がレーミゾフに何をもたらしただか、その一端を問うことである。

さて、レーミゾフは『剪り取られた眼で』の冒頭『記憶の結瘤点 (Узлы и закруты)』と題する序文で、「記憶」に焦点を集中し、次のように語っている。

「人間の記憶の内には、結び目を作る点、結び瘤を作る点 (узлы и закруты) がある。この結節点、結瘤点の内にはこそ人間の《生命》があるのであり、この結節点は、一生記憶から消えることはない。人間が生きている限り、記憶から消えることはない。人は死の前には《全生涯を思い出す》ものだと言う。だが、本当にそうだろうか？ それは散文的な精神の持ち主お好みの虚構ではないだろうか？ 何故なら、《死》、それは単に何か余儀なき分離を意味するだけであり、決して終わり (конец) を意味するものではないのだから(中略)。人間の記憶の結節点は無限に (до бесконечности) 辿ることができる。底なしの底へと連なる記憶の素晴らしい例は——偉大な作家達の諸主題である。しかし、単にゴーゴリ、トルストイ、ドストエフスキイのみならず、我々もまた皆(中略) 私のように出版のあても全くなしに辛抱強く書き (переписать) 続けている者もまた同じこと、(中略) 突然内なるものが波のように畝り寄せる時、その波の因果律を超えた畝りを辿って、我々の生以前の記憶をはっきりと眼にすることができる。(中略) 結瘤した記憶は一生人間を追いかける。人は突然それを思い出したり、突然眠に見たりする。眠の中には単に混乱した生があるだけではない、単に天啓や天からの徴があるだけではない、眠の中には深い、深

淵から姿を現わす記憶がある。《結瘤した記憶》の書を書くこと、それは出生以来の年数をはっきりと刻印された自分の生以上のものを書くことを意味する。そしてそのような書は《忘れ得ざること》についての書となる(7)」

眠<sup>ゆめ</sup>に発現する無意識の論理に対する無限の信頼を再確認したこの序文で、レーミゾフは彼の基本的な記憶観を明示している。即ち、記憶の個人的記憶を超えた無限性への信頼である。十年余りの沈黙の後に発表された眠<sup>ゆめ</sup>の作家レーミゾフの上の序文は、単に『剪り取られた眼で』の序文たるのみならず、1950年代の彼の創作活動全体の序文でもある。

『剪り取られた眼で』、これは、「自然から、極度に優しく超越的な受動的感受性を賦与されていた(8)」と評されるレーミゾフの幼年時代の魂が感受し吸収した世界の記録である。ここで彼はそれまで謎であった、彼の創造世界を支えて来た想像力の文学的源泉、伝記的源泉を自らに明らかにしようとする。幼年時代におけるゴーゴリ、ドストエフスキイ、レスコフ、『千夜一夜物語』、メリニコフ=ペチェルスキイ、アヴァクーム、ヴェリトマン、『ファウスト』、シェイクスピア、ノヴァリス、チーク、ホフマン、ボードレール等々等々及び無数の口承書承の民衆文学との出遇い受容が語られ、父母兄弟達や彼の幼年時代を取り囲んでいた「虐げられし人々」の記憶が呼び起される。

だがレーミゾフは単なる伝記を志向しているわけではない。「果して私は忘れることができるだろうか？」というリフレインの鳴り響く中、レーミゾフは、童話的文体で『剪り取られた眼で』の世界を眠<sup>ゆめ</sup>と現未分離の世界と化しつつ、時には彼の読書世界の人物そのものと化し(9)、時には民衆の想像力が生み出した人物そのものと化し(10)、時には父母兄弟あるいは「虐げられし人々」と同化し(11)、想像力と現実の境界を超え、彼個人の記憶という時間的空間的「内面の壁(12)」を超えて飛び回る。

レーミゾフが「ただお前だけを通じて、お前の魂だけによって私は何か一つの統体となっていた(13)」という妻セラフィーマの生涯を、レーミゾフ自身が直接には知らぬその誕生から結婚までの時代の妻の意識の歴史をも含めて抽出した『薔薇色の閃きの中で』、ゴーゴリの全作品を「覚めることなき眠<sup>ゆめ</sup>と眠<sup>ゆめ</sup>の中の覚醒の連環(14)」として把え、『ディカニカ近郷夜話』から『死せる魂』に到るゴーゴリの無意識の核を把えようとした『事物の火』も直接『剪り取られた眼で』の記憶の無限性への信頼と希求の上に成り立った作品で、これら三作品は『剪り取られた眼で』を核とした三部作を成し、Н. Кодрянская『アレクセイ・レーミゾフ』はその補註をなしている。「地下室のテーマに魂を握られた

作家<sup>(44)</sup>」(Г. Чулков) レーミゾフを、レーミゾフの尊敬する哲学者の一人 И. А. Ильин は「文学上においてすべてが許される世界 (вседозволенность)」へ遇進した作家と評した<sup>(45)</sup>が、正しく『剪り取られた眼で』を核とした1950年代の一連の著作の世界においてレーミゾフは、記憶の世界での вседозволенность を確信し、時空の壁を超えて亡びし人々の魂の中に入り込み、それによって彼自身の記憶と、彼の個人的な記憶を超えた無限の記憶を繋ぐ核を見出そうとしているのである。

さて、これら晩年のレーミゾフの変身の記憶の世界の原基となった『剪り取られた眼で』は、その作品世界の冒頭からして、個人の記憶を超えた記憶の無限性への信頼と希求から生まれている。「剪り取られた眼で」見られた世界の描写は、レーミゾフ自身の記憶を超えた記憶から始まるのである。彼は、まずイヴァン・クパーロの夜の彼の誕生の記憶について、「乳母の乳と共に飲み込んだ<sup>(46)</sup>」童話世界について語ることから始める。

そして、二歳。この年レーミゾフはタンスから転落し、眼を傷つけ、一生半盲で世界を凝視することとなった。『剪り取られた眼で』の表題はこの半盲の眼に由来するのだが、レーミゾフは、この転落によって初めて彼の裡に「意識が生まれた<sup>(47)</sup>」、と、次のように語る。

「二歳の時からはっきりとした記憶が始まる。私はまるで眠りから覚めたようであった。そして気がつく、世界へ——如何なる罪(преступление)の故か、それとも何かの試練の為か、——放り出されていた。それは、怪物たちが満ち充れる、眠と現の<sup>ゆめ うつつ</sup>纏れ合った世界であった (中略)

私の覚醒は、血から、疼くような痛み(боль)から、生まれた。何かして遊ぼうと(いや、この「遊ぶ」と言い方は単に世間の言い草を借りただけのこと、もっと正確に言おう、誰かが私の手を取り導き)私はタンスに這い上がり、タンスの上から、玩具のような暖炉の上に、鼻から真逆様に落ちた。そして死刑の判決を受けた者の最後の瞬間の鮮明な眼で(私はドストエフスキイの『白痴』でこれに出遇った)、私は見た。その時私はまだ女の子の着物を着せられていたのだが、その綾紋織の白い浮き縞を伝って、血が流れるのを見たのである。青い窓の向こうに……アンドロニコフ修道院の白い塔の壁が、鐘楼が見えた……と、何の前触れもなく、突然——突然、これこそ正に覚醒に他ならぬ——私は見た。《全世界》、を見たのである。——それは何という世界だったことか!——そして私は《くるくる転がって行った》……そして私は遠く彼方、底の方から、二度と繰り返されることのない自分の愛称(レーミゾフの童話世

界の象徴である——引用者註) が聞えて来るのを耳にし、眼を開けた<sup>18)</sup>」

この事件によって生じたレーミゾフの眼の異常が発覚したのは彼が十三歳の時のことである。レーミゾフはこの時初めて眼鏡をかけてこの世界を見た時の驚きを次のように語る。

「十三年間、私は何か際限ない自然の本源的な力の荒れ狂うファンタスティックな世界に生きていた。

悪夢にも似た何か別の次元の怪物が膨らみ（中略）その周りに人間の顔が輝き、物達が光を発している。これ、この《自然の感受法》こそ私の《自然の感受法》であり、それ故にこそ私は十三年間孤立していたのだ！しかし、（この十三年間）私は、今、突然私の眼に世界が開けて来た今ほど、自分が人と切り離された存在であることを痛切に意識したことはない——これが同じ神の世界だとは！……これは幾何学的に計量し尽し得る世界だ！……私はユークリッドの奴隷になったのだ<sup>19)</sup>。」

そして彼はまた繰り返す

「私は一つの姿の裡に生まれた、が、この世界に現われた時（タンスからの転落事件を指す——引用者註）には別の姿になっていた——我に非ざる者（не я）になっていたのである<sup>20)</sup>」

「私は玄妙不可思議なもの（чудное）をゴーゴリから、疼くような痛み（боль）をドストエフスキイから、心義しきことをレスコフから受け継いでいる。私の名がこれらの作家の註の中に留まると信じたい<sup>21)</sup>」後、レーミゾフはそう語ったが、レーミゾフの魂が時空の壁を超えて他者と自己の記憶の中を飛び回る『剪り取られた眼で』の世界で、「果して私は忘れることができるだろうか？」というリフレインの基底にあるものは、ドストエフスキイ、あるいはレーミゾフが「何かの罪によって地獄を追われた悪魔<sup>22)</sup>」と見なしたゴーゴリの幼年時代の記憶の影が込み込んだような上の引用文に見られる二歳時の「意識の覚醒」の記憶のリフレインの彼方にある世界、即ちレーミゾフ自身の表現を借りれば、「全世界」、「自然の本源的な力の荒れ狂う世界」「私が私であった世界」の記憶である。そしてこの「喪われた世界<sup>23)</sup>」とは正にレーミゾフが、自らの記憶の限界を超えて『剪り取られた眼で』の冒頭に書き込んだ意識覚醒以前の世界、即ちそのイヴァン・クパーロの夜の誕生から始まる「乳母の乳と共に呑み込んだ」民衆の童話世界、つまり、「ロシアの作家において、童話を語ることに彼においてほど重要な役割を果たした作家はいない<sup>24)</sup>」(F. Scholtz) と言われるレーミゾフの処女童話集『ポーソロニ』の母胎となった世界に他なら

ない。

戦争、革命、亡命、そして亡命中の深い沈黙期間を通じてレーミゾフは自己の作品中『ポーソロニ』に最大の愛着を示し続けている。彼はその間しばしば作品中に『ポーソロニ』の登場形姿を再登場させ<sup>20)</sup>、『ポーソロニ』に示された童女の眼で世界を眺め直そうとしたし、レーミゾフについて語る時欠かすことのできないと言われる遊戯的秘密結社「猿類大自由院」も『ポーソロニ』の世界から生み落されたものであり、この「三次元の世界からの脱出の象徴<sup>21)</sup>」もまた直接亡命第一期の彼の作品世界に入り込み<sup>22)</sup>、作品の枢軸を作り出している。また世界的玩具蒐集家としてのレーミゾフの出発点も『ポーソロニ』にある。そして何よりも強く彼の『ポーソロニ』への愛着を示すのは、亡命中の沈黙以前に残された最後の記録となった手紙において、彼が自ら『ポーソロニ』中の一形姿と化して手紙を書いているという事実<sup>23)</sup>、そして彼がこの長い沈黙期間中も、黙々と『ポーソロニ』に登場する諸形姿の絵を描き続けることだけは止めなかったという事実<sup>24)</sup>である。

しかし、レーミゾフが『ポーソロニ』の彼における重要性を特にはっきりと意識し、それに対して積極的に発言するようになるのは『剪り取られた眼で』を以って始めとする。『剪り取られた眼で』において彼は、『ポーソロニ』の母胎世界たる乳母の童話世界と、それと深く結びついた『ポーソロニ』中の諸登場形姿の原像の記憶を鮮らせ<sup>25)</sup>、『薔薇色の閃きの中で』では、これまた『ポーソロニ』の登場人物の重要な原像である一人娘ナターシャの二歳時の記憶が鮮らされ<sup>26)</sup>、『ポーソロニ』執筆時の状況の記憶が掘り起される<sup>27)</sup>。

しかし、1950年代のレーミゾフと『ポーソロニ』の記憶の繋りを最も如実に語ってくれるのは50年代の作品の源たる『剪り取られた眼で (Подстриженными глазами)』の表題そのものである。一般には理解し難いこの奇妙な表題は何を意味するのか、と Н. Кодрянская が問うた時、レーミゾフはこう答えている。

「私は眼を持って生まれた、だが眼というものは人の魂に従って与えられるものである。私の剪り取られた眼は私の前に、月や星や彗星の多次元な世界、光り輝く雲、生きた人間の周りに輝く震光の世界を繰り広げて見せてくれた。普通の眼には空間は満たされたものではない。だが剪り取られた眼には満たされぬ空虚な空間はないのだ<sup>28)</sup>」

さて、「剪り取られ眼で」のレーミゾフ自身による説明は、レーミゾフの読者を直接『ポーソロニ』に収録された童話『ザーイカ』の註に誘って行く。そ

ここで若きレーミゾフはこう語っている。

「ザイカ——子供達の眼は半ば盲目で注意深い。彼らにとっては恐らく世界には満たされぬ一隅もなく、周囲のものすべては生命、後に意識の発達に伴って、あるいは霧散し、あるいは自分の確固と定まった位置に身を落ちつけてしまうあの生命に沸き立っている。眠を覚醒と区別することなく、子供たちは昼と夜を……混同する<sup>84)</sup>」

この眠と覚醒未分離の童女の眼前に展開する「満たされぬ一隅もない」世界を描いた童話『ザイカ』は、『ポーソロニ』で、主題的にも作品構成的にも決定的な重要性を持っている。『ポーソロニ』でレーミゾフは『ザイカ』を要に、子供の遊戯として残った異教民俗の残滓や口承の童話を素材に創造した60の童話を、表題『お日様を追って』のとおり春夏秋冬の順に並べて眠と現の入り混じった半ば子供の眠のような奇妙な時間世界<sup>85)</sup>を創出して、原始の民の時間感覚と彼の裡なる時間感覚の繋りを示し、またその要たる『ザイカ』では、眠と覚醒未分離の童女ザイカと、その「満たされぬ一隅もない」世界の深奥に棲む、イヴァン・クパーロの夜の「生命の火」の素材たる案山子<sup>チューチェロ</sup>から生み出した生死未分離の存在チューチェロ・チュミーチェロに「始原の世界の全体性の明らかな徴<sup>86)</sup>」(エリアーテ)である両性具有を見出し、彼と原始の民を結ぶ無意識の繋りを示して、「我」と「我ら」の合体の歓びを歌った<sup>87)</sup>。

レーミゾフがその創作の無意識性を強調する『ポーソロニ』の主題、作品構成、そしてその大地の上に立った「我」と「我ら」の繋りはその後も長く、レーミゾフの創造にとって無意識の理想として残り続けた<sup>88)</sup>。短編を集成して一つの作品世界を創出するレーミゾフの作品の特徴を後年 B. シクロフスキイは主題のない文学<sup>89)</sup>と呼び H. Андреев は「ジャンルの破壊<sup>40)</sup>」と呼んでこれを文学者レーミゾフの最大の功績とし、また P. Carden は、後の彼のフォークロア改作群を把えて、レーミゾフは「ストーリーとしての物語によりも、物語を生み出す精神性により多くの関心を持ち、それ故、芸術家とその喪われた原始の意識を繋ぐ言語に眼を向けた。レーミゾフは魔力によって喪われた意識を把え、それと溶融しようとしているかのように見える<sup>41)</sup>」と語ったが、その原基は『ポーソロニ』の世界にある。

亡命後もまたレーミゾフは無意識の裡に『ポーソロニ』を範とし、時間空間を超えて「我ら」と繋がった我を見出そうと精力的な活動を続けた。しかしそこで彼は他を対象化する緊張感と引き換えに自己を対象化する緊張感を喪失する危険に絶えずさらされていた<sup>42)</sup>。1930年代のレーミゾフの長い沈黙はこの自

己対象化喪失の危険から生まれたものだと私は思う。そして『剪り取られた眼で』。

上に引いたレーミゾフ自身の『剪り取られた眼で』 解題が疑いの余地もなくはっきり示していることは、レーミゾフが『剪り取られた眼で』において再び「我」と「我ら」の繋った『ポーソロニ』、より正確に言えば『ザーイカ』の世界の再現を夢見たことである。

しかしレーミゾフは『剪り取られた眼で』において、「喪われた世界」、原始の世界と繋った『ポーソロニ』の時間感覚と両性具有の世界を再び見出すことができたかどうか。それを最も良く示してくれるのは、『剪り取られた眼で』の補註となった Кодрянская の記録に残されたレーミゾフの『ポーソロニ』に対する痛切な哀切の叫びの数々である。

「おお、ポーソロニ！ ああいう物はもう書けはしない。あれは一度しか書けないもの。……ポーソロニは大地の根そのものから生まれたものだ。あれこそ青春だ！<sup>49</sup>」

「(あの頃は) 苦しい日々だった……しかし、天から光が漏れて来た——そしてその時『ポーソロニ』が生み出されたのだ<sup>49</sup>」

「恐れと慄きを感じながら私はこの本を開く。……これは私の最初の本、私の《無私の本》……ここで——私は無心に歌った、鳥が歌うように歌った……大きな記憶——原基<sup>49</sup>」

「私は心の底からこの本を信じている——それはまったく軽やかな心から生まれたもの。そして《穏かな気分》の瞬時にふと思い出す何か春のようなものについての記憶」

確かにレーミゾフは『剪り取られた眼で』において時折限りなくその記憶の核に近づく。たとえばそれは、彼が十三歳で眼の異常を発見した後初めて、二人の男女の愛の地下世界での炎上を描いた『千夜一夜』に出会った時の記憶を蘇らせる時、レーミゾフの意識の表面にまさに浮上して来んとする。レーミゾフは『誰にも似ていない (Ни на какую статью)』と題する章でそれを次のように描く。

「まだ私の喪われた玄妙不可思議の世界に代わって書物の世界が現われ始めたばかりの頃、私は、『千夜一夜物語』と——幾千の童話の一つとしてこれほどまでに私の魂に触れたものはなく、今でも私はあれを忘れることができない！——その第十一夜物語と出遇った。『私のことだ』、そういう声が私の裡に聞えた。私は自分を兄として見た。だが私はそれ以上に鮮烈に自分を妹、

面紗<sup>ベール</sup>に身を隠し、香水の匂いを発散させ、さまざまの高価な装身を身につけた、妹、として感じた。『これほどの感覚が存在する、これほどの感覚の炎上が、無私<sup>私</sup>が、存在する』私は妹と兄の犯罪的な(преступный)な愛の物語の頁をめくっては物語を繰り返し繰り返し口の上ながら思うのだった。(中略)自分を妹と兄として感じながら、私は(中略)突然感じた。酔いが回ってくるのを、自分が酔っているのを<sup>48</sup>」(傍点引用者)

一般にレーミゾフの世界には両性具有のイメージがしばしば顔を覗かせる。彼が作品中に記した眠<sup>ゆめ</sup>ではしばしば男から女へ、そして女から男への変身が見られる<sup>49</sup>し、彼の残した絵の一片には中央に描かれた人物の下に「これは私が女性の服を着て歩いているところ<sup>50</sup>」という書き込みがなされている。彼が妻セラフィーマの処女性の中に入り込んだ『薔薇色の中で』は作品そのものが彼の両性具有性の無意識の発現と言えるだろうし、K. Geibはこの作品中で老婆が自分のことを男性形の過去語尾で語る奇妙な文章<sup>51</sup>を指摘している<sup>52</sup>が、これも主人公オーリャの原初の記憶に関係した文であり、レーミゾフの裡なる両性具有性を考慮に入れなければ理解不可能だろう。そしてレーミゾフはまたそのゴーゴリ論の中で、イヴァン・シュポニカの夢を取り上げ、女性が男性の裡に満ちるのは眠<sup>ゆめ</sup>の最も奥深い部分であると語っている<sup>53</sup>。また上述の Ильин はレーミゾフが人間の裡に見た暗い原基、レーミゾフの創作の最大の問題性を、レーミゾフの裡なる女性的原理に見出している<sup>54</sup>。

しかしこれらにおいて両性具有はレーミゾフの無意識の世界から再び浮上することはなかった。レーミゾフにとって上の記憶の再発見はよほど衝撃的なものだったのだろう。死の十日前にも彼は『剪り取られた眼で』に記したこの千夜一夜の「眠<sup>ゆめ</sup>」を思い出している<sup>55</sup>。

だが瞬時記憶の核を想起しかける場面があるとは言え、『剪り取られた眼で』でレーミゾフは『ポーソロニ』の世界を再現することはできていない。それが最も良く現われているのは、『剪り取られた眼で』の作品世界における時間的核の喪失である。上述の Н. Андреев は「しかしレーミゾフのジャンル破壊は成功しなかったように思える<sup>56</sup>」と語っているが、これも同じことを指している。作品世界における時間的核の喪失は両性具有が「始原の世界の全体性」へと繋ることを妨げている。そしてこの作品世界における時間的核の喪失は単にレーミゾフの老齢によるだけでなく、その亡命という条件から生まれたものだと思ふ。

レーミゾフが沈黙の中で執筆を再開したのは1943年、妻の死後四十日後のこ

と。レーミゾフは『薔薇色の閃きの中で』でこの四十日をキリストの荒野の試錬に喩えつつ、今彼にとってはパリが眠<sup>ゆめ</sup>なのではなくロシアこそ眠<sup>ゆめ</sup>なのだと悟ったと語った<sup>68</sup>後、その執筆再開時の状況を次のように描いている。

「私は書きながら生きた人間を眼前に見ていた（中略）。しかし、書き終えるや否や私は自分が霊安室にいるのに気づくのだった（中略）」

人間は自分の力を超えたものにも耐えることはできる。（中略）しかしあらゆる忍耐には限界がある。そして最後の忍耐の限度が切れた時、そこには音もなき黒い深淵が、自からの身からの脱出、分裂（раздвоение）が現われる。しかしそれは分身ではない。私の苦しみ苛まれた《私》の上に、私の力ある揺ぎなき《私》（《и-а》）が閃いているのだ<sup>69</sup>」

『剪り取られた眼で』はロシアを眠<sup>ゆめ</sup>として諦めたレーミゾフのロシアを奪還し、ロシアの民衆と繋った「我」を取り戻そうとする最後で最大の試みであった。だがここでは記憶の核たる「我」そのものが異国の地で分裂の危険に直面していた。この大地からの自己浮遊感覚こそがレーミゾフに自らの記憶の核を掴ませることを拒否し、彼の作品構成の軸を喪わせる最大の原因であったと私は思う。レーミゾフの『ポーソロニ』への哀惜の叫びは同時にこの自己浮遊の意識が生み出したロシアの大地への哀惜の叫びだったと言っていいたいだろう。

しかし、この大地からの浮遊の感覚は更にレーミゾフの文学意識そのものを極限まで問うことになる。その意味で興味を魅くのは、彼自身の重要な文学的源泉の一つであるゴーゴリについて、亡命後初めて書いた『事物の火』である。

ゴーゴリのホモセクシュアリティを真正面から取り上げた S. Karlinsky が、ナボコフのゴーゴリ論と並ぶ「鮮かなゴーゴリの読み込み<sup>69</sup>」「20世紀のゴーゴリの主導的後継者の一人による最も重要な研究の一つ<sup>69</sup>」と呼ぶこの特異なゴーゴリ論で、事実の集積の無意味性を指摘し<sup>69</sup>モチュリスキイ、ベールィ等のゴーゴリ論の視野の狭さを難ずる<sup>69</sup>レーミゾフはゴーゴリの自伝的側面を無視し手法の分析を飛び越えて直接作品世界に飛び込み、作品中の人物の「内的モノローグ<sup>69</sup>」を展開してゴーゴリと自己を繋ぐ無意識の核を把えようとする。ゴーゴリの「眠<sup>ゆめ</sup>を眠<sup>ゆめ</sup>見た<sup>69</sup>」このゴーゴリ論で、ローザノフのゴーゴリ論を補足しつつレーミゾフは、ゴーゴリはキキモラである、と結論する。そして、キキモラとは森の霊と人間の合の子であり、その存在は森の霊のもの、空想は人間のものである、と述べた後、彼は言う。

「キキモラは人間に索かれる、しかしそれは人間になることは許されていない（中略）」

——ロシア文学はゴーゴリに魅されている！

そ、その通りだ！ それが自らの裡から人間になりたいという夢を消すことさえできれば。しかしこの夢から逃れる道はそれにはない。そしてそのことの内にこそその運命がある<sup>64)</sup>

この一節の主調音は大地との繋りの強調にではなく、大地との乖離の苦痛の意識と大地への憧れの「悲劇的な響き<sup>65)</sup>」にある。そしてその大地との乖離の悲劇的苦痛をレーミゾフは「我々の憂悶<sup>66)</sup>」とし、その根源の発露をゴーゴリに見るのである。

もち論こうした大地との遊離の意識は、彼の作家形成の根源を襲い、「私にとっては本がすべてであった<sup>67)</sup>」「一生本だけが私を支えてくれた<sup>68)</sup>」等の叫びを生み、時に『ポーソロニ』において感じられた自己の裡なる大地との繋りへの疑念を抱かせるにまで到る<sup>69)</sup>。そこにあるのは「ロシアの伝統的土壌に確固として根ざしていた点で象徴主義以上のものを含んでいた<sup>70)</sup>」作家レーミゾフの、『ポーソロニ』において自分は古代の民俗を素材としつつ、原始の民の<sup>ゆめ</sup>眠を見ただけではないのかという恐怖である<sup>71)</sup>。

恐らく彼の大地喪失の意識がゴーゴリ以来の全時代を蔽い、その頂点に達したのは、彼が「私は生きながらに葬られた人間である。何故なら私は言葉を信じたからである<sup>72)</sup>」と語った時である。この時、民衆の言語の本質を把え民衆言語を創造しようと願いながら、ロシア時代には作家の為の作家等と非難され、皮肉にも亡命後「最もロシア的な (самый руссейший) ロシア作家<sup>73)</sup>」と呼ばれることになった、文学に淫した作家レーミゾフは、言葉に携わる者の誇りと同時に、同じく自分をしばしば生きながらに葬られたように感じていたゴーゴリ、そしてドストエフスキを学び、銀の時代には生きながらに葬られた存在を蘇らせようとし続け<sup>74)</sup>、亡命後には自身生きながらに葬られた<sup>75)</sup>彼自身の存在基盤たる文学の持つ恐ろしさをこの上なく痛切に感じていたと言っているだろう。

「そう、ゴーゴリよ、今日は春だ、手紙をくれ<sup>76)</sup>」、Кодрянская はレーミゾフの生前最後の言葉をこのように伝えている。ロシア象徴主義のゴーゴリ受容の問題は本稿の課題を逸れるが、レーミゾフ生前最後のこの言葉は恐らく「大地喪失」故に記憶の核を再び掴み得なかった「亡命」作家レーミゾフが、自らの大地喪失の根源にある銀の時代の創作活動の基盤の一つとなった作家存在に対して問いかけた文学そのものの持つ謎に関する問いかけの一つだったと言っているのではないだろうか。

- 注(1) Кодрянская, Н., “Алексей Ремизов”, Париж, 1959. стр. 96.
- (2) Там же, стр. 9, 118, и т. д.
- (3) Ремизов, А. М., “Кукла”, Берлин, 1923, стр. 46.
- (4) Ремизов, А. М., “В розовом блеске” Hertfordshire, 1969, стр. 381.
- (5) Кодрянская, ор. cit., стр. 10.
- (6)たとえばレーミゾフは『ポーソロニ』以前に長編『池(Пруд)』や中編『時計(Часы)』を書き溜めていたが出版社がなかった。これらの作品は『ポーソロニ』の成功により、一九〇八年単行本として初めて陽の目を見ることができた。
- (7) Ремизов, А. М., “Подстриженными глазами”, Париж, 1951, стр. 5.
- (8) Полторацкий, Н., “Русские зарубежные писатели в литературно-фило-софской критике И. А. Ильина”, в “Русская литература в эмиграции”, ред. Полторацкий, Питтсбург, 1972, стр. 276.
- (9) “Подстриженными глазами”, стр. 61, 86, 239, и т. д.
- (10) Там же, стр. 130, 216, 214, и т. д.
- (11) Там же, стр. 121, 132, и т. д.
- (12) Кодрянская, ор. cit., 178.
- (13) Ремизов, А. М., “Огонь вещей”, Париж, 1977, стр. 28.
- (14) Чулков, Г. И., “Сон в подполье”, в “Наши спутники”, Москва, 1922, стр. 20.
- (15) Полторацкий, ор. cit., стр. 276.
- (16) “Подстриженными глазами”, стр. 114.
- (17) Там же, стр. 30.
- (18) Там же, стр. 29.
- (19) Там же, стр. 72.
- (20) Там же, стр. 173.
- (21) Струве, Г., “Русская литература в изгнании”, Париж, 1956, стр. 259.
- (22) “Огонь вещей”, стр. 26.
- (23) “Подстриженными глазами”, стр. 73.
- (24) Scholtz, F., “Vom Volksmärchen zum volkstümlichen Kunstmärchen, Aleksej Michajlovič Remizov als Märchenerzähler”, in “A. M. Remizov, Russische Märchen, München, 1976, p. 8.
- (25) Ремизов, А. М., “Русалия”, в “Русалии”, Берлин-Петербург-Москва, 1923. и т. д.
- (26) Резникова, Н., “Из воспоминаний о А. М. Ремизове”, в кн. “Мосты”, 1968, 13–14, стр. 370.
- (27) Ремизов, А. М., “Взвихренная Русь”, Париж, 1927, стр. 272–297, “Кукха”, ор. cit., стр. 38–43. и т. д.
- (28) “Письма А. М. Ремизова и В. Я. Брюсова к О.Маделунгу”, Copenhagen, 1976, стр. 56.

- (29) Гречишкин. С. С., “Архив А. М. Ремизова”, в кн., “Ежегодник рукописного отдела Пушкинского Дома 1975”, стр. 34.
- (30) “Подстриженными глазами”, стр. 28, 249, и т. д.
- (31) “В розовом блеске”, стр. 297–304, и т. д.
- (32) Там же, стр. 302, и т. д.
- (33) Кодрянская, *op. cit.*, стр. 96.
- (34) Ремизов, А. М., “Посолонь”, München, 1971, стр. 259.
- (35) Чулков, *op. cit.*, стр. 11.
- (36) М. Эриарде, 『悪魔と両性具有』, せりか書房, 1974. p. 141.
- (37) 拙稿「幻の両性具有——レーミゾフ『<sup>ポ</sup>ソ<sup>ロ</sup>ニ<sup>ョ</sup>フ(お日様を追って)』の世界——(一)~(三)」(「ロシア文学論集」創刊号~第3号, 1977, 12~1979, 2, 所収) 参照
- (38) 拙稿「『亡命』と民衆の逆説——『亡命』作家レーミゾフの孤絶と受容——(一)」, (東京大学文学部ロシア文学研究室刊「ロシア『亡命』文学の研究」, 1979, 3, 所収) p. 47. 参照
- (39) Шкловский, В., Соб, Соч. Москва 1974, том 1, стр. 184.
- (40) Андреев, Н., “А. М. Ремизов”, в кн. “Грани”, 1957, 34–35, стр. 212.
- (41) Carden, P., “Ornamentalism and Modernism”, in “Russian Modernism—Culture and the Avant-Garde, 1900–1930” (ed. G. Gibian, H. W. Tjalsma), Ithaca and London, 1976, p. 58.
- (42) 前掲拙稿「『亡命』と民衆の逆説」p. 54. 参照
- (43) Кодрянская, *op. cit.*, стр. 172.
- (44) Там же, стр. 180.
- (45) Там же, стр. 168.
- (46) Там же, стр. 182.
- (47) “Подстриженными глазами”, стр. 86.
- (48) “Взвихренная Русь”, стр. 319, 339, и т. д. また, “Подстриженными глазами”, стр. 89, 143, 179 等参照
- (49) Кодрянская, *op. cit.*, стр. 58.
- (50) “В розовом блеске”, стр. 137.
- (51) Geib, K., “A. M. Remizov”, München, 1970, p. 155.
- (52) “Огонь вещей”, стр. 74.
- (53) Полторацкий, *op. cit.*, стр. 280.
- (54) Кодрянская, *op. cit.*, стр. 125.
- (55) Андреев, Н., *op. cit.*, стр. 212.
- (56) “В розовом блеске”, стр. 378.
- (57) Там же, стр. 381–2.
- (58) Karlinsky, S., “The Sexual Labyrinth of Nikolai Gogol”, Cambridge, 1976, p. 291.
- (59) *Ibid.*

- (60) “Огонь вещей”, стр. 22.
- (61) “Подстриженными”, стр. 74, Кодрянская, *op. cit.*, стр. 172.
- (62) Geib, *op. cit.*, p. 166.
- (63) Юрьева, З., “Ремизов о Гоголе”, в кн. “Новый Журнал”, 1958. кн. 54. стр. 118.
- (64) “Огонь вещей”, стр. 116.
- (65) Там же.
- (66) Там же.
- (67) Кодрянская, *op. cit.*, стр. 30.
- (68) Там же, стр. 20.
- (69) “В розовом блеске”, стр. 284, Кодрянская, стр. 291.
- (70) Mirsky, D. S., “Contemporary Russian Literature, 1881–1925”, London, 1926, p. 283.
- (71) 前掲拙稿「幻の両性具有(≡)」, p. 42. 参照
- (72) Remizov, A. M., “Mu’allaqāt”, in “The Bitter Air of Exile: Russian Writers in the West 1922–1972”, Berkeley, Los Angeles, London, p. 47.
- (73) Андреев, Н., *op. cit.*, стр. 205, и т. д.
- (74) 『ポーソロニ』そのものがこう呼ばれ得るだろう, また同じ初期の代表作『十字架姉妹 (Крестовые сестры)』も, チュルコフの指摘しているように (Чулков, *op. cit.*, стр. 30., cf. “Крестовые сестры”, в кн. “А. М. Ремизов. Рассказы IV”, München, 1971, стр. 74. 142.) その主人公は, 生きながられに葬られた人間である。
- (75) “Подстриженными глазами”, стр. 15, и т. д.
- (76) Кодрянская, *op. cit.*, 329.

“Память” для Ремизова в эмиграции — О Ремизове после  
повести «Подстриженными глазами»

Кацуси ФУТИКАМИ

Когда Н. Кодрянская спросила А. М. Ремизова, в каких книгах нужно искать к нему разгадку, он назвал две книги: первый сборник сказок “Посолонь” (1907), и автографическую повесть “Подстриженными глазами” (1951). “Посолонь”, которая была создана из его изучения фольклора и из его искажения начала жизни, является основным пунктом его следующего пути, и Ремизов оказывал большую привязанность к этому произведению в литературе и в индивидуальной жизни. Особенно эта привязанность усиливалась в 1950 годах, когда после долгого молчания в эмиграции он опять принялся за перо. Бессознательно ощущая, что в “Посолони” заключена его прапамять, он, в произведениях в 1950 годах, начиная с “Подстриженными глазами”, энергично и сознательно старался восстановить мир “Посолони” и через это взять обратно его потерянный сказочный мир, где неотделимо объединяются его “я” и “весьмир”. Эта статья ставит целью проследить, как Ремизов искал его “потерянного” в 1950 годах, и как действует жизнь вне России на его произведения.